

第 2 回世田谷区総合教育会議

日：平成29年10月28日（土）

場所：世田谷区役所第3庁舎3階
ブライトホール

午後1時開会

○保坂区長 皆様、こんにちは。お時間となりましたので、これより世田谷区総合教育会議を開催していきます。世田谷区長の保坂展人です。どうかよろしく願いいたします。

本日は、教育委員の皆様にご多用のところお集まりをいただきました。

私のほうから御紹介いたしますと、まず、澁澤委員でございます。環境NPO中山間地域のフィールドワーク等を常時されているという立場から御発言いただきたいと思っております。

続けて、松平委員でございます。長年、先生として、また、学校の校長先生として教育に携わり、現在、大学でも指導されているということでございます。

その次に、井上委員でございます。教育学の研究者でもいらっしゃるって、世田谷区の学校運営委員長を務められたこともございます。その教育専門家という立場でございます。

次に、永井委員でございます。小学校のPTA活動を通して、PTAの会長もされてきました。保護者の立場から御意見を言っていたいただきたいと思っております。

そして、堀教育長です。教育委員会を代表して発言をいただきたいと思っております。

さて、本日の総合教育会議なんですが、透明性を高めるという観点から、傍聴の希望者を公募いたしました。また、この後に開かれる教育委員会主催の教育推進会議のワークショップに御参加いただく皆様にもこの総合教育会議をぜひお聞きいただきまして、その後の議論に役立てていただきたいというふうに考えておりますので、どうかよろしく願いいたします。

初めてこちらの総合教育会議に参加したという方はいらっしゃいますか、ちょっと手を挙げてみてください。ちょっと説明しますと、区長——市であれば市長になるんですが——が主催して、教育委員の皆さんとともに公開の場で議論するというのが総合教育会議なんですね。日々の学校運営、教育内容については、教育委員会のほうで議論していただいているんですが、もう少し大きなビジョンであるとか方向性などを自由闊達に、しかも、区民の皆さんが参加をする、きょうはこのホールでやっています。実は7月には約400人ぐらい、あちらの区民会館のほうで大勢参加してやったこともございます。大体年に2回やっております、ことし7月の区民会館は2つの論点を議論させていただきました。1つは幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくり、これが1点目。2点目が「学びの質的転換」と「新教育センターの役割」、これは世田谷区教育委員会で今構想をし進めているものなんですが、こちらについて議論をいたしました。

きょうは、テーマとして2つありまして、議論1として出ております「配慮を要する子どもたち」と「学びの多様性」になります。2番目に「子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境」なので、先ほど紹介した7月の1、2といろんなところでかぶさったりとか、つながり合ったりするテーマでありますけれども、この2つを軸にして、一応予定は2時10分までということを進めてまいりたいと思います。

(スクリーン使用)

○保坂区長 それでは、最初の1番目の議題なんですけれども、障害等があり、また、配慮を要する子どもたちと学びの多様性ということですから、障害のあるお子様たちに対する学校教育全般の配慮の問題。それから学ぶということは、1人1人の育ちや学びの違いがあります。そこを多様な道のりでサポートしていけないか、こういったことでございます。

では、学校現場に長くいらっしゃった松平委員からお願いしたいと思います。

○松平委員 それでは、私が校長時代の経験を踏まえて幾つかお話ししたいと思います。

配慮を要する子どもといっても非常に多岐にわたっているわけでありまして、各学校現場ではその対応に対して非常に頭を悩ましています。世田谷には他地区から見れば非常にうらやむような制度があります。例えば、学校包括支援員制度があります。それは、配慮を要する子どもたちのために、各学校に1名配置される支援員のことでございます。

また、各学校では特別支援コーディネーターという役割をする担当教員を決めています。世田谷区の学校は、小・中学校で「学び舎」といった取り組みをしているので、このコーディネーターを中心に話し合いをし、宿泊を伴う行事や移動教室、修学旅行の際には、「学び舎」単位で支援員を融通しあうなどの対応をしています。

それから、学習が極端に遅れている生徒が在籍している学級では、「取り出し授業」もやっています。これも教育委員会から区費講師を派遣してもらい、教室の授業では十分な理解ができない生徒を取り出して効果を上げたということもありました。少人数指導については、東京都でも加配という形で教員を配置してくれていますが、それだけでは十分でないので、同様に区費講師を配置していただきました。特に、英語や数学においては少人数や習熟度別指導といった対応をしました。

さらに、小・中学校の情緒、知的、肢体といった特別支援学級を併設している校長が集まり、情報交換等をしている「設置校長会」もあります。私自身は、世田谷区での勤務が長かったものですから、これが当たり前だと思っていましたが、他地区から来た校長等は

「世田谷区の子どもたちは非常に恵まれている」と驚いていました。今後も、校長先生方は、1人1人の子どもたちのさらなる教育の充実のために教育委員会に働きかけ、指導に取り組んでいくことと思います。

○保坂区長 ありがとうございます。この学校包括支援員のほうも、やはり学校の規模が、世田谷区の場合、比較的小さな学校から1000人近くいる学校まで規模の違いがありますので、やはり1人では足りないという声もあって、もっと充実させていきたいということもありました。また、学校の先生方の年齢構成が、五、六年前だとベテランの50代の方が一応いらっしやってというのが、ほぼ職員室からもう卒業されてしまったのが現在というふうに聞いています。

つまり、結構20代の若手の先生方が多いということで、教室の中でなかなか座ってくれないとか、その子の得意とすることと苦手とすること、ここをうまく対応するのが難しくて悩んでいらっしやる先生もいるというふうにも聞いているんです。

では、井上委員のほうから「配慮を要する子どもたち」と「学びの多様性」について、区の教育はどういうことを目指していったらいいのか、このあたりについて御意見をいただけたらと思います。

○井上委員 近年の教育における大きなトレンドに、「インクルーシブ教育」が広がっていることがあります。「インクルーシブ」とは、「包括的」とか、「包み込む」という意味で、障害のあるなしにかかわらず、誰もが家の近くで一緒に勉強できることをめざすものですが、世田谷区ではその理念をさまざまな角度から現実のものにしようとしています。

よく言われるのは、支援のあり方を「点」ではなく、子どもが成長していく過程に合わせて「線」にしていこう。さらに、「線」から「面」にしていこう。家庭と学校、学校と学校、あるいは、家庭も学校も含む地域全体でこの問題を考えていこうと、まだこれからという部分もあるのですが、広がりをもって取り組んでいこうとしています。

それと、こうしたテーマについては、もう1つ、「ユニバーサルデザイン」というものが注目されています。先ほどの「インクルーシブ教育」は、どちらかというと、「障害のあるなしにかかわらず、みんなでいっしょに」というニュアンスがありますが、「ユニバーサルデザイン」では「誰にでも共通する」ということに力点があります。障害があってもなくても、子どもたちは多様ですから、その多様な子どもたち誰もが学びやすい学校にしていこう、という考え方です。この会場には校長先生もいらっしやるようなので、具体的なことはご教示いただきたいと思うのですが、例えば、ペンであればペン、すべてのものにデ

デザインがありますが、外形的な色やかたちだけでなく、使いやすさとか、他のものとの相性とか、さらには、教室の環境とか、いろんな約束ごとなども含めて、学校全体を学びやすいものにしていくことです。

例えば、よく、黒板の両脇にはいろんな掲示物が張られていますが、世田谷区のある中学校では、生徒が板書事項に集中できるように、そうした掲示物を一切、張らないようにしていました。また、多くの小学校で、授業中のいろんな約束事やルールを教室の目につくところに掲示して、子どもたちが場面場面で、次に何をすればいいのかが具体的にわかるようになっていきます。そうした工夫があることで、子どもたちが大事な情報にアクセスしたり、自分から何かを発言したりすることが格段に容易になります。このことは、どの子どもにも共通することで、そうした「ユニバーサルなデザイン」を意識した取り組みが世田谷区の学校で始まっています。

ただ、ある学校でかなり進んでいても、すべての学校で共有されているかと言えば、そうでもない部分もあり、そうした点が今後の課題だろうと思います。

○保坂区長 一言で配慮を要する子どもたちといっても、いろいろな得意、苦手があって、私が授業で見せていただいたのは、特に板書で字を書くというのがすごく遅くなっちゃったり、間に合わないし、苦手な子がいました。彼の場合はタブレットを特別に持ち込んでいて、これはすごく速いんですね。タブレットというのを持って、すごくレイアウトしたりして、それで授業に参加している。こういう形も始まっているんだなんて思いました。

永井委員のほうで、親の立場から配慮を要する子どもたち、いろんな障害、得意な部分、不得意な部分、それぞれあります。子どもたちの世界で、今井上委員がおっしゃったようなインクルーシブですね。はじいてしまう、排除するというのと逆です。包み込んで一緒にやっついこうね、仲間だよねという形で友情を育むというあたりは、親はどのようなことを考えたらいいのか、そのあたりをお願いします。

○永井委員 先ほど、井上先生からインクルーシブ教育という話もありましたが、このインクルーシブ教育という言葉自体は、保護者も耳にはしているんですが、一緒に教室で学ぶということは知っていても、どこまで理解しているのかということはありません。ただ、PTAの研修会とか親の勉強会などで取り上げて、共通理解の場を設けたりしていますので、少しずつ浸透してきているのかなと思います。

これまで、どちらかというと障害のある子とない子を分けて教育を受けてきたので、親の受け取り方というのにも差があると思うのですが、子どもたちにとっては同じ空間に一

緒にいるという環境で生活することは、とてもよい経験だと私は思っています。人間的にも成長できますし、社会に出てからも、少なくとも過去に1度は障害のある人と身近でかわってきたという経験は、よい影響を与えるものじゃないかなと考えます。

親としては、自分の子どもと一緒に学ぶ子がどういう障害があるのかということを知って理解すること、どういうタイミングで助けが必要なのかということのを、家庭でも子どもと一緒に理解して行動できるようにすることが必要じゃないかなと考えます。

それと、障害のある子もない子も、親にとっては子育てというのはそれぞれ悩みがありますから、親同士がつながりを持って受け入れる姿勢を伝えることも大事だと思います。そのためにも、学校で、例えば保護者会などで担任の先生から、子ども1人1人に対してどういったときに手助けが必要で、それ以外は普通にしていってもいいとか、共通理解するための機会をつくっていただいたり、障害のある子の親が子どもの障害について話しやすい環境を整えてほしいですし、PTAを通して、例えば単P研修会などで、先生と保護者が共通理解していくことも大事ではないかと思えます。

○保坂区長 ありがとうございます。澁澤委員は、全国の中山間地、限界集落など、大学生とフィールドワークされたりとか、多分お子さんの様子などもごらんになっているかと思えます。一昔前、私は今61なんですが、やはり子ども同士で遊んでいく中で、例えば野球とかはほとんど球を拾ったり投げたりが不得意な子は、何となく君は外野にいなよというふうに言ったり、子ども同士でそこをアレンジしながら、何となく仲間からはじかないでいたような思い出があります。

今、子ども同士、あるいは子どもだけでいる時間というのも大分少なくなっている中で、近代というような成り立ちの中で、今の子どもたちの状況とこのテーマについて、ここを少しお話しいただけたらと思えます。

○澁澤委員 インクルーシブ教育のお話がずっと続いていて、今区長が言われましたことは、多分そのインクルーシブ教育を受けるもう1つ先の、私たちの社会がインクルーシブ社会なのかどうかということもあるのかなと思っています。

というのは、私、地方へ行って、地方のおじいちゃん、おばあちゃんたち、要するに高度経済成長以前に暮らしをしていたその人たちと話をしている、その人たちのお父さんの話ですとか、その人たちのおじいちゃんの話聞くんですが、職業は何をやっておられましたかといって、まず答えられる人はほとんどいないんですよ。それは何かというと職業を決めつけられない。うちのじいちゃんは野菜もつくっていたし、米もつくっていたし、

大工にも出稼ぎにも行っていたし、薬の行商もやっていた。だから、非常に働き方が多様な社会がつい50年ぐらい、高度経済成長以前まではあった。

この50年間は、ある意味では日本人全員がサラリーマンになった社会なんですね。みんなな専門を持つようになって、それで年収を幾ら取るかということを考えるようになってきました。ですから、1次産業の農業をやっている人たちでも、例えば私はトマトを日本一うまくつくりますと。だけれども、うちはトマトしかつくりませんで、トマトを売ったお金でお米を買っていますという農家が出てくるようになってしまった。そうすると、そのスペシャリストばかりの世界の中でどうやって勝ち抜くかということを経験現場でも求められるようになってしまって、だけれども、本当にそれでいいのか。これからの社会を考えていくと、AIですとか、IoTですとか、人工頭脳に仕事というものがどんどん変わっていったときに、スペシャリストばかりを育てる教育というのからもう1回ジェネラリストとして、要するに1人の人間としてどう生きていくか。それから、それを受け入れるのは何も1つの働き方だけじゃなくて、幾つもの働き方を組み合わせてもいいんだよねという、それぞれの人が自分の役目を見つけられるような社会をどうつくれるかということが、これからとても重要になってくる。

その意味では、教育の現場では、私は小学校の現場を見せていただいて、確かにいろいろな配慮を要するお子さんたちがいるけれども、子どもたちは物すごく優しいですよ。子どもたちはちゃんと彼らに役目を見ているし、彼らと一緒に育っていくんだということを感じている。あんな芽を競争社会で潰さないで、その子たちがそういう芽を持ちながら社会人として育っていく、そのような教育を世田谷で実現できればいいのかなというふうに思っています。

○保坂区長 堀教育長とオランダの教育を見に行ったことが3年前にありまして、ちょっとおもしろいなと思ったのは、1位になるということはほとんど目指していないんですね。みんなで幸せになる、要するに全員で幸せをシェアする、それがいいことなんだというふうに、結構、若者たち、子どもたちも考えているんですね。でも、どちらかというと、1位になることに非常にこだわって、友達ライバルということで、偏差値競争や受験競争もそこに拍車をかけたんですけれども、多分これからは、そういう大きな企業、大きな会社に入れば安泰だという、ある種幸せな時代はもう終わりましたので、何が起こるかもう全くわからないという中で、やはり自分1人が誰かを出し抜くというよりは、やっぱりチームでとか、子ども集団の中で、配慮を要するということに、どうも教員や大人が配慮す

るというニュアンスが言葉の中ではあると思うんですけども、これは子ども同士が気を使うというふうな読み方もできると思うんですね。そういう気を使う子どもを僕たちは歓迎したいし、また、そういう環境づくりをしていけるといいなど、今、澁澤さんのお話を聞いて思いました。

そこで、教育長なんですが、この課題について、やはり人手も必要だ。オランダで見えたのは、本当に1人1人に違う教材を、タブレットならタブレットでも当てているんですね。日本の教育の場合、制度が違うので、それはなかなかすぐには実現しなくても、でも、傾向としてはやはりタブレット、いわゆる電子的な教材なども入ってきましたから、つまずきの箇所とか得意とする分野がそれぞれ違いますものね。そういう子どもたちをそれぞれの特性においてフォローしたり伸ばしたりしてあげるといふような方向に、この教育現場がもっともっと変わっていけばいいなという願いはあるんですが、実際にはどうでしょうか。

○堀教育長 幾つかちょっとお話をさせていただければと思うんですが、配慮を要する子どもたち、こちらのほうにちょっと書かせていただきましたけれども、特別支援学校、世田谷ですと光明学園というようなところとか、特別支援学級、固定学級ですね。知的とか身体とか、こういう形でいろんな個性に応じて、子どもたちが多様な学びをするんだという環境が今つくられています。

十分ではないんですが、例えば今、児童・生徒のところに、この一番左のほうにほとんどの問題を通常学級で対応する、これが先ほどから出ているインクルーシブ教育の1つの実現で、皆さんごらんになったことがあるでしょうか、大阪の大空学校というところでこの教育が展開されました。通常学級にいわゆる配慮を要する子どもたちが何人もいて、普通のという大変ですが、通常の子どもたちと一緒に教育をする。そこで、今区長からお話しがあった、ともに労りあったり、助け合ったり、協力し合ったりするという教育がそこで展開しているんですね。このDVDを毎年夏休みに、川場村のほうで新任教育、教員の教育、研修をするんですが、ちょっと間を置きましたけれども、3年連続そのDVDを見せております。まだ大学のほうでは特別支援教育が体系的に構築されておきませんので、今後、その専門的な教育を教員が受けるようになりますが、そういうことを受けながら、私どもは教員の意識、それとスキル、それと環境ですね、学校包括支援員、そういう方々を体系的に網羅していきたい。

それが今、私どもが目指しております、教育総合センターをつくりたいというふうに思

っております。今、弦巻のほうに中央図書館、教育センターがありますが、中央図書館も90万区民にふさわしい図書館にしたいという思いがありまして、なおかつ、教育会館、教育センターとしてふさわしい内容も構築していきたいということで、今の若林小学校の跡地に教育総合センターを開設したいと思っております。その中では、きょうのお話に出ております特別支援教育について拠点としていきたいという考えも持っておりますので、教員の研修、それと、先ほど永井委員から出ました家庭教育をサポートするPTAの方々の対応とか、そういうものが教育総合センターで体系的に展開できるといいなということで、今、基本構想、基本設計という段階に来ております。

○保坂区長 教育長、第2次教育ビジョンとか、こちらのほうに少し触れたいとおっしゃっていたので、続けてください。

○堀教育長 皆さんのほうにきょうお配りしていると思いますが、きょうは総合教育会議という形でお話しさせていただいております。こちらの総合教育会議では、教育についての方針である「大綱」を固めていくというふうになっておりまして、この4つの教育目標、基本的な考え方、基本方針、施策の柱を、こちらの区長をトップとした教育委員の方々とお話し合いをして決めていっております。平成30年から、これはまた新たに第2期という形で進めていきますが、第2期では8本の施策の柱をつくらせていただきました。

これに基づきまして、第2期行動計画のリーディング事業という形で10項目挙げさせていただきました。後ほど教育推進会議で、皆さんからまた御意見をいただきたいと思っておりますが、6番目、いじめ防止対策及び不登校対策等の総合的な推進、それと9番目、家庭教育への支援と幼児教育の充実ということも入れながら、平成30年度から、教育委員会、皆さんと一緒に進んでいきたいと思っております。これはパブリックコメントをいただきましたので、それを踏まえ、また皆さんから後ほどお話をいただきながら、30年からの4年間の計画としていきたいと思っております。

○保坂区長 今説明がありました、これからの世田谷区の教育をどういう柱立てで展開していくかということのまとめが話されたと思います。こうした教育の基本的方針、「大綱」を決めるに当たっても、教育委員の皆さんとこうやって今議論をしています。また、教育推進会議では、今皆さんにテーブルでワークショップ形式で意見を出していただくというようなことを、世田谷区の教育をより改善していくことにボトムアップしてくる、こういったことをしっかり考えておりますので、どうかよろしくお願ひしたいと思ひます。

第1部の配慮を要する子どもたちの支援、学びの多様性というところをもう少し話して

みたいんです。今、教育委員会の方針がありましたけれども、7月にも、学ぶというのは何なんだ、学力って突き詰めて言うと一体どういう学力がこの先役に立つんだと。例えばAIがどんどん発達してきましたよね。スマートフォンに日本語で何か話すと、すぐ英語で返してくれるような機能は今だってあります。3年後にはもっと出てくるかもしれません。

長いこと日本の教育は、これは世界もそうかもしれないけれども、正確に記憶する。そしてその記憶したことを正確にテスト等で検証して、覚えたね、わかったねということで進んできた部分があります。それはこれから先もあると思います。全部機械に任せるわけにはいかないだろうと。ただ、しかし、一方で、人とつながるとか、あるいはチームを組んでやってみるとか、人の気持ちを理解するとか、そういう部分の力が、どうも今の日本の子どもたち、若者たちは落ちてきているのではないだろうか。これは企業でいえば、国際競争力が低下をしていると言われていています。日本独特のたくみの製品とか、それこそiPhoneが登場したような世界を席卷するような、昔、ソニーがウォークマンなどで席卷しましたけれども、そういう意味では日本の社会自身が少し縮み志向になってはいないだろうかなんていうことをこの会議でも議論してきました。

この学びの多様性ということで、松平委員、日本語学校の校長先生としてアメリカにも滞在されていたと思うんですが、今の時代、学びの多様性について一言お願いします。

○松平委員 日本では、テストを行っても、その結果を廊下に張り出すことはまずしません。ところが、向こうではテストの成績も張り出し、皆に知らせます。つまり、学習能力もその子もっている能力の1つだ、という考え方です。日本では、スポーツで優れた成績をとったり、習字や絵がうまかったりした場合には表彰しますが、学力テストについてはしません。この成績優秀者を表彰しない日本のやり方は、「成績がすべて」という暗黙の了解を逆説的に焙り出している感じがします。

大学に進学する場合をみても、アメリカの大学は授業料が非常に高いです。高校までパブリックスクールは無料ですが、大学の授業料は高額です。だから、子どもたちは奨学金をもらって進学するのが一般的です。しかし、高額な授業料がかかる大学に奨学金を借りてまで行くだけの価値があるかを考えたとき、大学を出たからといって、それに見合う職業につけるわけでは決してないので、自分の能力に合ったところに行こうとします。だから、高校生を見ていても、学力が全てではないとの考え方もあり、それぞれが自らの生きがいをもって学校生活を送っていると感じました。一方、日本では学力が全て、学校の勉

強ができないと落ちこぼれでダメだというところがあります。子どもの多様性を見ていくという意味では、日本に比べアメリカの方がはるかに進んでいると感じています。

○保坂区長　ここで、教育学の井上委員に登場いただかなければいけないんですが、ヨーロッパだと、これはまたアメリカと違って、大学も大学院も無料に近いんですかね。医療も無料の国が多くて、学びの多様性ということだと、日本の子どもは拘束時間でいえば相当勉強していますよね。多分韓国とかになるともっと、中国とかももっとやっていますよね。相当夜中までやるみたいなの、今すごい競争があるみたいなんですけど、オランダに行ったときに聞いてなるほどなと思ったのは、夕方6時にはみんな家庭で一緒に夕飯を食べるんだよと。食べない家庭はほとんどありません、例外的なことになると。それで、親と子で相当しゃべるんだというようなことが日本の社会と大分違うんだななんて思いました。学びの多様性というところでいかがですか。

○井上委員　歴史的な成り立ちや社会的環境が異なりますので、欧米と日本を同じように論じるのは難しいですが、区長のお話で頭に浮かぶのは、欧米ではそれぞれが「個」というものを日本に比べてかなり強く持っているように感じられることです。ですから、他の人と比べるというよりも、自分が何をやりたいのか、というような観点での意識というか、モチベーションが重視されているように思います。

日本では学年進級のしくみが定着していて、7歳になる春に小学校に入学して、1年経つと、ほぼ全員が2年生になります。中学1年生も1年が経過すれば、みんな2年生になり、留年することは滅多にありません。でも、オランダなどの場合には、勉強が十分に身につかなければ、もう1回、同じところを繰り返すということは、わりとあるそうです。勉強したことが十分に身につけていないのに、進級しても意味がない。それよりも、自分がしっかりとできるようになることが大事である、という思いが子ども自身にもあるのかもしれない。そうした意味では、勉強のあり方やテーマの持ち方などでも、その人の生き方において何が重要であるのか、ということが個人においても社会においても、強く意識されているのではないだろうか、と感じます。

私は教員養成に携わっているのですが、教員志望の学生たちは子どもたちみんながわかるような授業をしたい、どの子どもできるようにさせてあげたいと思っています。でも、「学びの多様性」ということからすれば、わかるようになるとしても、そのわかり方はひとりひとり異なるわけですから、授業中にみんなが「正解」に辿り着くと考えるのは幻想かもしれないし、「正解」があるのかどうなのかについても、よく考えなくてははいけません。

学生は真面目ですから、教員が一所懸命やれば、子どもたちはわかるようになると思っています。授業で「正解」がわかるよりも、子どもがわかりたくなるような授業、もっと勉強したくなるような、そういう授業こそが大事だということに視点を変えていく。平均点とか、偏差値ではなく、その子どもにとって本当に必要な力がつくような教育とは何かを考えていくことが、今回のテーマである「学びの多様性」を考えるうえ重要ではないか、と思いました。

○保坂区長 先ほどからオランダの話ばかりしているんですが、学校を結構つぶさに見せていただいて、こういう視点は重要だなと思ったのは、でき過ぎる子も支援の対象でしたよね。要するに授業をわかってしまうと。簡単に言えば物足りないという子に対してはやっぱりピックアップして、次の教材なり課題というのに取り組んでもらう、そういうこともやっていましたよね。藤井少年が高校に行くかどうか、行くと決断をしたようなんですけれども、やっぱり集中力が物すごくある子どももいますよね。それから、いろんな才能を内に秘めていて、爆発的に伸びていくという子も場合によってはいるわけですね。日本の社会の場合、まだまだ多様な選択肢になっていないんだけど、世界が大きく変わっていく中で、それぞれのテンポやリズムで伸びていくことが可能な学びというのができていくといいなと思います。

子どもが育つのは学校だけではないので、2番目のテーマに行きたいと思います。

「子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境」というテーマなんですね。ここには放課後に子どもたちが過ごす新BOPもあります。世田谷には幸いなことにプレーパークですね、冒険遊び場、木に上ったり、泥だらけになったり、ベーゴマをやったり、なかなかいいですね。世界の人々が今視察に来ているプレーパークがございます。そこと付随して外遊びが大事だねということで、区でそとあそびプロジェクトもやっております。また上のほうに行くと総合型地域スポーツクラブ、学校を舞台にして、地域の方が参加してスポーツを楽しんでいく、そこに子どもたちが中心にいるという活動です。学校の部活動。また、新・才能の芽を育てる体験学習、遊び場開放、そしてこういったことを全て目配りする教育総合センターというようなことがございます。

まず、ここは澁澤委員のほうから、先ほどの多様な学びとも絡めながら、どのような学校外のチャンス、環境を得ると、子どもたちは伸びていくのか、あるいは心を耕せるのか、そのあたりをお話いただけたらと思います。

○澁澤委員 先ほど、学校はスペシャリストだけでいいのかという発言をさせていただき

ましたけれども、スペシャリストも必要です。だけれども、何もスペシャリストだけでなくでもいい。それは今、多様という言葉を使っていますが、みんな多様であることを認めるんだと。その認めるということは、多様であるけれども、底の部分で1つにつながっているという感覚を、子どもたちにどう持たせるかということが重要なのだと思っています。

つながっているという感覚は、それこそ愛だとか優しさだとか、あるいは慈しみだとか、あるいは人を許す、あるいはその前に自分を許すとかという、僕たちが普通は宗教や芸術の領域に投げ込んでしまっているような言葉を、やっぱりちゃんと子どもたちと対等に話し合っていかなきゃいけないんだろうなと。それは家庭の中でも、社会の中でも、それから学校の現場でも、そういう視点を一方で持っていないと、ただ多様でばらばらになればいいという話ではないのだと、前提として思います。

それは何のためにかというのは、まさに今区長がおっしゃったように、私たちはこの50年間、本当に豊かになろうとだけ思ってきたのだけれど、子どもたちにはやっぱり幸せになってほしいと思います。その幸せというのは、基本的には人と人との関係性だとか、自分と自然との関係性、あるいは同学年の子どもとの関係性だとか、あるいはひょっとしたら今度は自分たちより下、あるいは上の学年との関係性、親たちとの関係性、つまり、世代間との関係性ですとか、自然との関係性、人と人との関係性というその関係性の中に幸せという言葉、自分がここにいていいんだということを感じることができる思いというのが潜んでいるのだらうと、私はこの社会を見ています。

自分1人の中だけで、自分だけで生きていくということ、それは今はお金さえあればできますけれども、自然というものをベースとした社会や、私たち1人も自然の中の一部でしかありません。何かほかのものの命をいただいて、毎日自分たちの命を長らえているという生き物でしかない。

そういうことを考えると、自然の中で自分の心を開いて、自然の中にあるもの、それは言葉だとか学問だとかということ認識するそれ以前の問題。よく非認知能力というような形で言われていますけれども、暗黙知とか非認知能力みたいな引き出しをどれだけたくさん持てるかが、自分が将来幸せな人生を送るときに物すごく重要なことなのだろうな。

その意味では、前のここの総合教育会議でもお話しさせていただきましたけれども、世田谷は、それこそほかの区と比べたら非常に恵まれた環境にある。その中で、いろんな形で人と触れたり、自然と触れたりということをやらせてあげる形。今区長がおっしゃった

プレーパークですとか、BOPですとか、川場移動教室ですとか、いろんな形でその子たちの芽を伸ばしていく。それをちゃんと評価してあげていく。それで、遊んでいたんだから勉強しなさいではなくて、遊びも重要だといって家庭で評価してあげていく、そんな社会が必要だなということを思っています。

それともう1つ、今いろいろな学校をずうっと回らせていただいて、キャリア教育ということを中心にやられておられます。かつての、私どもの時代のキャリア教育というのは職業教育でした。ですから、こんな職業があるよということ子どもたちに教えていく教育ですが、今の世田谷の学校でやっているキャリア教育は、社会に出て、いろんな職業に確かにつくのですが、そうすると、学校の多くの授業の中には、正解があるんですが、社会の中には正解がないことのほうがはるかに多いわけです。そんな中でやっていくと、ひょっとしたら自分の眠っていた能力だとか評価される基準がたくさんあるんだなど、子どもは持って帰ってくるんですね。ですから、キャリア教育は職業訓練じゃなくて、自分自身の能力をもう1回見詰め直す教育だというふうに、世田谷の学校では変わってきています。

そんなような形で、自分たちの隠れた能力、学問だけではない、あるいは体育の成績だけではない、隠れた能力をどんどん子どもたちが見つけていけるような環境整備というのはやはり進めていってあげたいなと思っています。

○保坂区長 ありがとうございます。

ようやく時代が変わってきて、私、区長になる、政治家になる前に、ジャーナリストとして教育問題を取材する機会が多かったんですね。いろいろな討論会とか、教育委員会主催のシンポジウムとか、特に学校のいじめの問題などで多く出席したことがございます。

30年ほど前に、子どもはもっと遊んだほうが良いと言うと孤立しました。保坂さん、変な意見を言わないでくれと、テレビで叱られたこともあります。子どもが遊ぶなんて当たり前じゃないか。でも、だんだん当たり前じゃなくなってきたんですね。

今、子どもたちは体を動かすということといえば、昔の子よりも動かしているかもしれない。いろいろなプログラムがあります。少年サッカーも野球もやっているし、大体子どもたち自身がいろいろ忙しいですね。

実は簡潔に言うと、子どもに少し時間を返してあげられないだろうか。つまり、何をしてもいいという時間です。きょうは決まっていない、つまり空白ですね。実はスケジュールがみんな埋まっている子が多いんですね。そのときに、1人なら1人で何をやるか考え

てみるのもいいですよ。何もできなかった、それでもいいです。でき得れば、では、ゲームでもやるかになりそうなんですけれども、世田谷の図書館は少し学校司書さんを置いて、本を読むというのはすごく大事なことです。司書さんが入ることで年間の貸出数がやっぱり変化していくんですね、ふえていきます。この本を読んでみたらというやりとりがあると、子どもにとってすごくインセンティブになりますよね。本を読むという1人の時間も大事だし、時間を返してあげるという意味は、何もやると決まっていなかったことを、3人なら3人で相談して、結局何もやらないことになって、3人で漫画を読んでいたということになりそうなんです、それでも構わないと。

つまり、何か自分たちが任されて、どうするんだということを相談して、「スタンド・バイ・ミー」の映画じゃありませんけれども、少し冒険してみようとか、あるいはこれまでできないことをやってみるんだとかというようなことを子ども時代に経験しておくことが、やっぱり豊かな関係性をつくる。大人になったときに、いろいろな予想外の冷たい視線だとか、失敗だとか、そういうことで自分が潰れそうになるときに援助してくれる、あるいはこんなに苦しいです、困っていますということ、例えば職場の仲間に言う、こういう基本的なことのやりとりが遊びの中で実はもうふんだんにあるわけですね。ということ、ようやく世田谷区でもそとあそびプロジェクトというところで、子どもの外遊びの時間って結構大事だねということに気がついて取り組み出しております。

ちょっと自分の意見も言ってしまいましたけれども、では続いて、永井委員に、親にとって、そういう子どもの遊びなどはどういうふうに見えるんだろうか、あるいは遊んでいないで勉強しなさいって、昔から、我々のころから親は子どもに言ってきたわけですが、逆は余りないですよ。勉強しないで早く遊んでこいってなかなか言わないんですが、そのあたりはどうでしょうか。

○永井委員 私自身が小さいころに外を駆け回って遊んでばかりいるというような子どもだったので、外遊びが嫌いで、家の中で1人遊びが好きで、1人で遊んでいるという子どもいると思いますけれども、私はやっぱり小さなうちからできるだけ外で遊ぶように連れ出していくことが大事だと思っています。

外はいろいろ刺激があります。危険なこともあります。けれども、外でなければわからないこともたくさんあると思います。例えば雨が降った後の水たまりに入ればしゃべしゃべとやると、水がしぶきになって飛ぶのが何かおもしろいとか、足場の悪いところを走って転んで痛い思いをしたから、次は転ばないように走ってみるだとか、葉っぱや茎にと

げがあって、不用意にさわると、葉っぱってこういうふうになっているんだということに気づいてみたり、挙げればたくさんありますけれども、小さな失敗とかけがえというのを重ねながら、外遊びを通していろんな経験を重ねて、さまざまな発見をしたり、自分で自分の身を守るということも学んでいくと思います。そうした経験というのは、幼稚園、小学校に入学した後も生きていくのではないかなと思っています。45分という授業を、しっかり座って先生の話聞くこともなかなかできない子どもの中にはいると聞いていますし、普通の体育館とか、普通の校庭を走っていても転ぶ子が多いというのも聞きます。

余談ですけども、私の息子が小学校のミニバスケットボールチームに入っていたころに、私もアシスタントコーチで入っていたんですけども、足を上げずに走る子がいて、よく転んでいたんですね。それで、まず足の指を使って手拭いをたぐり寄せるという練習をさせたんですけども、それができなかったんです。足の裏と指を使って土を捉えるとか、そういう経験が少なかったんじゃないかと思いますので、舗装されていない地面を足の裏で感じて走るというのは、体のバランスを保つことにおいても重要ですし、自然と体力もつくと思います。

世田谷区は緑の多い公園もたくさんありますので、小さいころから子どもの成長に合わせて一緒に走ったり、観察したり、外遊びを楽しんでほしいと思います。

それとは逆に、小学生以上の子どもたちが外遊びをするのに、体を動かす場所だったり機会というのが昔と比べて少なくなって、公園でボール遊びが禁止だったり、大きな声を出すと近隣住民から叱られたりと、窮屈な環境になっているというのも実感します。私の息子も小学生のころに叱られた経験があったようですが、体が大きくなれば遊び方も変わってきます。体力測定でも体力低下、特に腕力や握力が低下しているという数値が出ていると聞いています。昔は日常生活の中で雑巾を絞って床を拭いたりだとか、布団を畳んで押し入れに入れるという動作が自然と腕力や握力という力がつくという日常の動きがあったと思うのですが、生活が便利になって、そういったこともなくなってきました。

今は意識して外遊びができる場所に行って、体を動かす機会をつくってあげるというのも親の役割かなと思っています。身近にボール遊びができる場所として、今のスクリーンにもあります遊び場開放もありまして、時々、お父さんと子どもがキャッチボールしたり遊んでいる姿も目にしますが、平日放課後、子ども同士で遊びができたり、ボール遊びができる公園というのがもう少し欲しいなと感じています。世田谷区ではそとあそびプロジェクト・せたがやというものもあるようですけれども、どういった内容かというのは、保護

者も詳しく知る機会があるといいですし、大いに活用していただければいいなと思います。

○保坂区長 ありがとうございます。世田谷区で唯一、次大夫堀公園に田んぼがございまして、最近多いんですね、1500人ぐらい来ます。保育園児、幼稚園児から大人まで、特にちっちゃい子たちが泥に入るのはきっと生まれて初めてなんですね。本当に見ていて危うげで、バランスをとるのに苦労しながら、それでもちょっと15分ぐらいすると、何とか田植えもそれなりにやっているというようなことも見ております。

松平委員はもともと体育の御専門家なので、このあたり、総合型地域スポーツクラブや部活の問題も含めて、子どもの身体、体の問題、学校外の環境ということで少しお願いします。

○松平委員 私は長く中学校の教員でした。部活動の意義については皆さん認めるところであります。ところが、最近部活動に関する問題が多く取り上げられています。学校はブラック企業であるとも言われています。部活動の指導があるから教員の負担が非常に重くなっている。だから、部活動を欧米のように外部に任せるべきだという声もあります。

私自身の考えとしては、子どものよさを多面的に見るという意味では、やはり部活動は学校に残すべきであるし、教員は積極的にかかわるべきだ、と思っています。世田谷区の場合には、他地区に比べ外部指導員制度が非常に充実しています。だから、外部指導員をうまく活用すれば、もっと教員の負担も軽減されると思います。加えて、先ほどの関係性を広めるという意味では、部活動は学校生活の中で数少ない異年齢での活動です。現在、子どもたちが異年齢でかかわる機会は、地域でも激減しています。それを考えれば、学校での部活動は異年齢集団での貴重な体験の場といえます。

先ほど、澁澤委員から非認知能力という話が出ました。リーダーシップであるとか、協調性であるとか、思いやりといった非認知能力は、部活動を通して子どもたちの身につけていくものでもあるので、ぜひ教員も一緒にかかわってほしいと思います。

世田谷区では、総合型地域スポーツクラブが、全国に先駆けてスタートしたという歴史があります。事実、現在も多くの総合型地域スポーツクラブが区内各地域にあります。これと学校がうまく連携できれば、部活動に対する教員の負担軽減にもつながると思います。しかし、学校は閉鎖的で、なかなか外のものを受け入れられないという体質があります。ここで、私自身の経験をお話しします。世田谷に東深沢スポーツ・文化クラブという区内で最も古い総合型地域スポーツクラブがあります。私は校長時代に、このクラブと学校と連携できないかと考えました。連携するにはウイン・ウインの関係がないと、なかなかう

まく進みません。当時、卓球部で全く素人の教員が顧問を持つことになりました。学校は指導者がいない、東深沢スポーツ・文化クラブは活動場所での時間が限られている。そこで、同じ時間帯に同じ場所で活動すれば、子どもたちも大人から学べる。このようなウィン・ウインの関係を築くことができ、その取り組みは今も続いています。生徒は技術的な指導も受けられ、クラブの方たちも活動時間の確保ができる。つまり、互いに良好な関係が見出せるかどうかということが、うまく学校と地域との連携を推進するポイントになると思います。

○保坂区長 ありがとうございます。地域と学校とスポーツ、あるいは文化ということで、これから総合型地域スポーツクラブというのが1つの縦割りとか、あるいは年齢集団を崩す、また、地域の大人と子どもと一緒に卓球をやるとか、そういった姿が1つの可能性なんだなというふうに思いました。

それでは、このテーマで、次に、教育長のほうから新・才能の芽を育てる体験学習を初め、学校開放とかいろいろ取り組んでいることについてお話をお願いします。

○堀教育長 まず、皆さん方におわびを申し上げようと思っておりますが、新・才能の芽、ドリームジャズバンド、あの事業は新・才能の13年続いた事業でした。8月20日に最後の発表のときにああいう場面が出てきまして、日野さんの行き過ぎた指導ということで、本当に皆さん方に御心配をおかけしまして申しわけありませんでした。

日野さんもあの後すぐに、私どものほうに謝罪をし、私どもも区長と3人でお会いして、今までの対応、それと今後、子ども1人1人に対してどう対応していくかということも踏まえ、来年度に向けてしっかり検証して対応していこうということになりました。改めてこの場をおかりして情報提供させていただきたいと思っております。

今、新・才能の芽の話がありましたが、先ほど、30年度から第2期行動計画のリーディング事業を見ていただきましたが、あの中に3で才能や個性をはぐくむ体験型教育というのがあります。子どもたちの可能性をいろんなところで伸ばしていきたいということを考えておりまして、才能の芽も新という形に名前をつけさせていただきまして、いろんな事業に取り組むことにしております。

ドリームジャズバンドもそうですけれども、今、プログラミング、ICT、AIとかいうものが非常に速いスピードで進んでおります。今回、新・才能の芽でもプログラミング教育について、30名を2回ということで60名募集したところ、3400名の保護者の方から電話をいただきました。もう2割の方しか受けられなくて大変申しわけなかったんですが、

非常に関心があるし、学校もちろん、この前、デンマークの皇太子の方が私どもの小学校で展開しているプログラミング教育をごらんになっていきました。やっではおりますが、こういうものに対して、いわゆる学校外を踏まえてどう対応していくかということを今検討しております。世田谷区の場合、そとあそびプロジェクトとか、プレーパーク、BOP、そういうものがいっぱいありますので、それを体系化していきたいと。

それと、先ほど区長のほうから話がありましたが、オランダに行ったときに1つお話があったのは、配慮を要する子で、なかなかついていけない子というものもあるんですけども、飛び抜けた子という子もいるんですね。日本の場合はまだまだそれについての理解がないんですが、そういう特別な能力にたけている子、そういう子に対しても、来年度からちょっと検討していきたいなと思っております。例えば北海道のほうではアートに特化した全寮制の学校、公立高校なんですけども、できたという話もあるようです。

こういうものが総合教育センターという中で、子どもの可能性をどういう場面、どういうアプローチをしたら伸びていくのかということ、それこそ総合的に教育総合センター等のところで検討していきたいなと思っております。

○保坂区長 ありがとうございます。60名がプログラミングできたんですね。3400人が申し込んだら2%ですね、済みません。

あと、教育長が言っておられた教員に見せている映画のタイトルは、皆さん見る機会があったらぜひ見てください。大空小学校のこと、「みんなの学校」といいます。簡単なタイトルですね。「みんなの学校」で大空小学校、その学校はもう本当に障害を持っている子がたくさん来ている学校。同じ教室で、校長は駆け回りながら一生懸命やっている、こういった映画です。

次に、井上さんのほうに移っていくんですけども、どうでしょうか、我々は将来のことを最近余り楽観的に考えていなくて、地球環境の問題等、本当に深刻な問題もあります。国際関係もかなりいろいろ心配なことが多いんですが、私が一番心配なのは、日本の子どもたち、特に日本の若者たちですよ。高校生、大学生、これは自己肯定感がかなり際立って低いんですね。これはいろいろな国際比較で数字が出ています。例えば自己肯定感、自己有用感ということが国際比較で、中国、アメリカは8割ぐらいがいいところがあるよと思っているのに、日本だと二、三割だったりするというあたりが極めて心配です。物質的にも豊かだし、学びの環境とか、芸術・文化、科学、たくさんのいろんな刺激や学びの環境があるように見えながら、どこか土台のところで大丈夫かなというところは、この間、

この総合教育会議でも議論しているところですが、そのあたりをこのテーマで可能性を伸ばす学校外の教育環境についてお話しいただけますでしょうか。

○井上委員 子どもたちは、小学生になると「〇〇小学校の何年何組の〇〇さん」というかたちで、学校生活と結びつけてアイデンティティを形成していきます。区長が言われたように、日本の子どもたちの自己肯定感、自己有用感が低いことが指摘されており、なぜそうなのかは難しい問題ですが、「〇〇小学校の〇〇さん」という一元的な自己像にとらわれ過ぎていることも一因ではないかと考えています。

先ほどのお話のように、世田谷区には学校外にもさまざまな学びの環境がありますので、それを活用していくことができますが、それが学校と同じようなものになってしまったらいけません。保坂区長が言及された「スタンド・バイ・ミー」にしても、あるいは「千と千尋の神隠し」のような日本のアニメにしても、子ども映画・少年映画の名作とされるものの多くは、子どもたちが「日常」から「非日常の世界」に「冒険」に行き、「冒険」から帰ってくると「見なれた風景」が「違ったもの」に見える、つまり、一回り大きく成長した、という構造で描かれています。大事なことは、「冒険」は「仲間」といっしょにするのであって、決して、「ひとり」ではないことです。そうした「仲間」は「スタンド・バイ・ミー」のように同級生の場合もあるし、ファンタジーでは、人間ではなく、妖精であったりすることもあります。いずれにしても、日常から離れ、仲間とともに、さまざまな体験をしながら、自分自身や世界を見つめ直していくわけです。

そうした意味で、学校とは異なる環境や人とのかかわりの中で、子どもたちが安心して新しいことに挑戦できるような機会をたくさん用意していくことが、子どもたちの「〇〇小学校の〇〇さん」ではない部分、もしかしたら、子ども自身も気づいていない部分を豊かにすることができるのではないかと考えています。そのことがひいては、自己肯定感、自己有用感を高めていくことに繋がればと思っています。「冒険」ですから、大人が関与し過ぎてはいけませんが、今、あるものをより豊かなものにしていくために、まだまだ工夫の余地はあると感じます。

○保坂区長 ありがとうございます。そろそろまとめの時間になりました。本当に「スタンド・バイ・ミー」なんか、四、五回ですか、見るたびに見え方が違ってきて大好きな映画なんですけれども、これは見る人によって見え方が違う。私なんかは非常に懐かしいなという感じで見ますけれども、やっぱり外で遊んだことがない子どもたちにとっては、また見え方が違うんでしょうね、そんな気がします。

仲間という言葉も出ました。ここにある中でもう1つ重要なところで、ぜひ入れておきたかったなというのは児童館ですね。世田谷区の喜多見児童館というのがあって、なかなかおもしろいことをやっています。児童館の子どもたちが多摩川べりを歩いて大田区まで行ったら、何とかの渡しという石の看板が立っていたそうです。これは渡しって何だろうと。渡し船の何かじゃないのと言ったら、宇奈根というところがあって、川崎も宇奈根というところがあるんですね。多摩川の流れが変わったことで、昔は同じ部落がちょっと川で分けられてしまったということらしいんですが、そこに宇奈根の渡しというのがあって、これが昭和20年代まで運行していたと。その渡し船を手伝っていたおじいさんというのがまだ御健在で、子どもたちがやってみたいと言ったときに、その船の作り方を教えてくれるという、これはまたラッキー、恵まれて、児童館で子どもたちが、おじいさんの指導のもとに船をつくったんですね。それをせっかくだからというので、地域の親たちや、PTAや、青少年委員や、皆さんが非常に熱心に、ここは大人も遊んだんだと思いますけれども、江戸時代のその渡し場はどうだったんだろうか、だんご屋があったらしいとか、いろいろ調べて再現したんですね。

そういった形で200人ぐらいの大人たち、子どもたちが集まって、そこに川崎市長が対岸にいて、子どもたちと渡し船で迎えに行くと。船の中で川崎市長と話し合っただけで包括協定を結んだというのは、これはでき過ぎた話なんですけれども、その前からそういう話があったんですが、この子どもたちはやっぱり達成感がありましたよ。

これはなかなかできることじゃありませんけれども、そんな大々的じゃなくても、児童館はやはり学校外の子どもの居場所として、まさに今児童館デビューという言葉が、お子さんを持ったお母さん方が、一時は公園デビューでしたけれども、最近は世田谷では児童館デビューですから、児童館でいろんな情報を仕入れながら、世田谷にそういう多面的な子育ての活動や教育、子どもたちの文化活動、スポーツ、たくさんありますので、みんなで楽しく切り開いていこうよという基調を持って、そういったたくさんの楽しい扉が、楽しいボックスがあるような子どもの環境をつくっていくことは、きっと教育や学びにとってプラスになるのではないかということ、あとは教育長に具体的に考えていただいとすることで、皆様、またワークショップでも少し話題にさせていただければと思います。

約束の時間になりましたので、これにて総合教育会議、本日は終わりとさせていただきます。御清聴ありがとうございました。(拍手)

午後2時11分閉会